

磯漁の名称ナギマミ（凧間見）・ナガミについて

昆 政明¹⁾

The report of fishery " Nagimami " " Nagami " on the reef seashore

Masaaki KON

Key words : 磯漁、見突き漁、イソマワリ、ソコミ、ナギマミ、ナガミ

1 はじめに

磯漁は海岸近くの磯で行なう漁のことで、小船の上からガラスと呼ばれる箱メガネで海中をのぞいて、根付きの魚や海藻、ウニ、アワビ等を採取した。磯漁は「磯に生息する魚介類を採取したり捕獲すること」で、その種類には磯で行う「刺し網漁、一本釣漁、潜水漁、見突き、磯物採り」がある。これらの中で「見突き」は、「船上から水中をのぞき見して貝類・魚類・海藻類などを長い棹や棒をふるって突き取ったり、振り取ったりする漁法」で、地域によってさまざまな名称があり、主なものとして「イソミ（北陸沿岸）、カナギ（鳥取県）、ヤストリ（青森県）、イソネギ（新潟県佐渡）、イソマワリ（北海道）、イサリ（南九州）、ボーチョウ（神奈川県）」がある。（辻井善弥 1999）

辻井が記載している青森県における見突きの名称「ヤストリ」は、ホコの先にヤスを装着して行う漁法の種類を指す名称であり、これを包括する名称としてイソマワリ・ソコミが広く用いられている。本報告では、青森県における磯漁の名称分布を整理するとともに、これまであまり注目されることのなかった、イソマワリ、ソコミ以前に磯漁をあらわす言葉として使用されていたナギマミ、ナガミに関する事例をまとめて報告するものである。

2 ナギマミの事例

(1) 上北郡野辺地町野辺地 表1-11)

磯漁をソコミ（底見）という。昔はナギマミ（凧間見）という名称が一般的であった。油を海面に流して海底をのぞいていたが、ガラス（箱メガネ）の普及にともなってソコミとなったと言われる。

ソコミはイソブネやジャッペを使用して、一人で船の船尾側（トモ）の左舷（トリカジ）から身を乗り出して行なう。ガラスを口でくわえ、膝を立てて、右手にサオ、ホコを持ち、左手でネリガイを操り船を移動させながら海底の獲物を狙う。磯漁は同じ陸奥湾内でも、夏泊半島では作業は船首側の右舷で行い、操船にクルマガイを使用する。

採取具はヤス、タモ、カイドリなどで、サオの先に装着して使用する。サオはヒバの芯を丸くしたものを使用する。深いところはアンチャの木で作ったホコを継ぎ足す。サオ、ホコとも二ヒロの長さである。これより深いところはさらに竹を継ぎ足す。海底から30センチぐらいの所に船からモッコを下げておき、獲物を一時これに入れておくことによって作業の能率を高める。磯漁の主な漁獲物はナマコ、ホタテ、アカザラ、ウニ、アワビなどである。野辺地ではコンブ、ワカメなどの海藻類の採取は行なっていない。（昆政明 1990）

(2) 上北郡野辺地町有戸 表1-10)

この地域では磯漁のことをソコミといった。また、古い時代にはナギマミという言い方が一般的であった。ソコミはガラス（箱メガネのこと）をかぶって、海中を覗きながらクマデ（カイドリ）・三本ヤス・六本ヤスで、ホタテ・アカザラ・ナマコ・アワビ・ホヤ・シウリ貝・蟹や、カレイ・アブラメ・カワハギ・カジカ・タラ等の魚類をとった。コンブやワカメといった海藻類はなかった。

ソコミに使う船はイソブネでこれをシマイハギともいった。有戸ではイソブネとシマイハギは別の船と考えられており、シマイハギはイソブネより大型で、ロクマイハギよりは小型の船と考えられている。また蟹田ではイソブネより少し大型の船をジャッペといった。ソコミでは漁場までは、帆やクルマガイを使用した、漁場では船の後部（トモ）の左舷から身を乗り出して作業した。左手でカイをネリ、ガラスを口にくわえて右手でカイドリやヤスを使った。この作業をする場所をネリバといった。また作業を左舷で行なうので左舷をマエブネ、反対に右舷をウシロブネといった。二人で作業するときには、一人は船の中央（ドノマ）でクルマガイを扱い、取り手の指示で船を動かした。「マエ着けろ」といえば船のトモの部分を左舷側によ寄せ、「マエ開けろ」といえば右舷側に移動させた。「かけ」といえば船を前進、「バック」「あと」「ゴースタン」は後進のことである。行き過ぎた時には「すぎた、すぎた」とい

1) 青森県立郷土館 学芸課長（〒030-0802 青森市本町二丁目8-14）

表1 磯漁の名称および報告出典一覧

1	イソマワリ	八戸市大久喜	「磯漁」『青森県沿岸漁業調査報告書』	2002年	昆 政明	青森県立郷土館調査報告第46集
2	ナギマ	八戸市鮫町	「日本磯漁伝統の研究〔XⅢ〕」	2007年	田邊 悟	千葉経済論叢第36号
3	イソマワリ	下北郡東通村小田野沢	「生業」『小田野沢の民俗』	1983年	成田 敏	青森県立郷土館調査報告第14集
4	イソマワリ	下北郡東通村尻屋	「精算労働」『東通村史－民俗・民俗芸能編』	1997年	昆 政明	東通村
5	イソマワリ	むつ市大畑町	「生業」『下北半島北通りの民俗』	2002年	昆 政明	青森県史叢書
6	イソマワリ	風間浦村蛇浦	「生業」『蛇浦の民俗』	1988年	成田 敏	青森県立郷土館調査報告第23集
7	ナガミ	むつ市脇野沢 寄浪	「生業」『下北半島西通りの民俗』	2003年	昆 政明	青森県史叢書
8	ナガミ	むつ市脇野沢 小沢				
9	ソコミ	むつ市川内町蠣崎				
10	ソコミ ナギマミ	上北郡野辺地町有戸	「生業」『野辺地の社会と民俗 有戸の事例』	1991年	昆 政明	北海道みんぞく文化研究会
11	ソコミ ナギマミ	上北郡野辺地町野辺地	「生業」『野辺地の社会と民俗 野辺地の事例』	1990年	昆 政明	北海道みんぞく文化研究会
12	ナギマミ	東津軽郡平内町東田沢	「生業」『夏泊半島の宗教と民俗』	2003年	小林亜希子	弘前大学人文学部宗教民俗学実習報告書Ⅱ
13	ソコミ ナギマミ	東津軽郡平内町浦田				
14	イソマワリ	青森市浅虫	—	1999年	昆 政明	青森市史調査
15	イソマワリ ナギマミ	東津軽郡今別町婁月	—	2009年	昆 政明	青森県史調査
16	イソマワリ ナギマミ	東津軽郡外ヶ浜町三厩 宇鉄	「生業」『宇鉄の民俗』	1987年	成田 敏	青森県立郷土館調査報告第21集
17	イソマワリ	北津軽郡中泊町下前	「磯漁」『青森県沿岸漁業調査報告書』	2002年	昆 政明	青森県立郷土館調査報告第46集
18	イソマワリ	北津軽郡中泊町脇元	「生業」『脇元の民俗』	1985年	成田 敏	青森県立郷土館調査報告第19集
19	イソマワリ	西津軽郡深浦町関	「生業」『関の民俗』	1984年	成田 敏	青森県立郷土館調査報告第16集
20	イソマワリ	西津軽郡深浦町岩崎	—	2008年	昆 政明	県史調査
21	イソマワリ ナギマミ	函館市銭亀沢石崎町	「銭亀沢の生産労働」『函館市史 銭亀沢編』	1998年	昆 政明	函館市
22	イソマワリ ソコミ	函館市住吉町				
23	イソマワリ	北海道檜山郡江差町	「生業」『江差の社会と民俗 五勝手の事例』	1993年	昆 政明	北海道みんぞく文化研究会

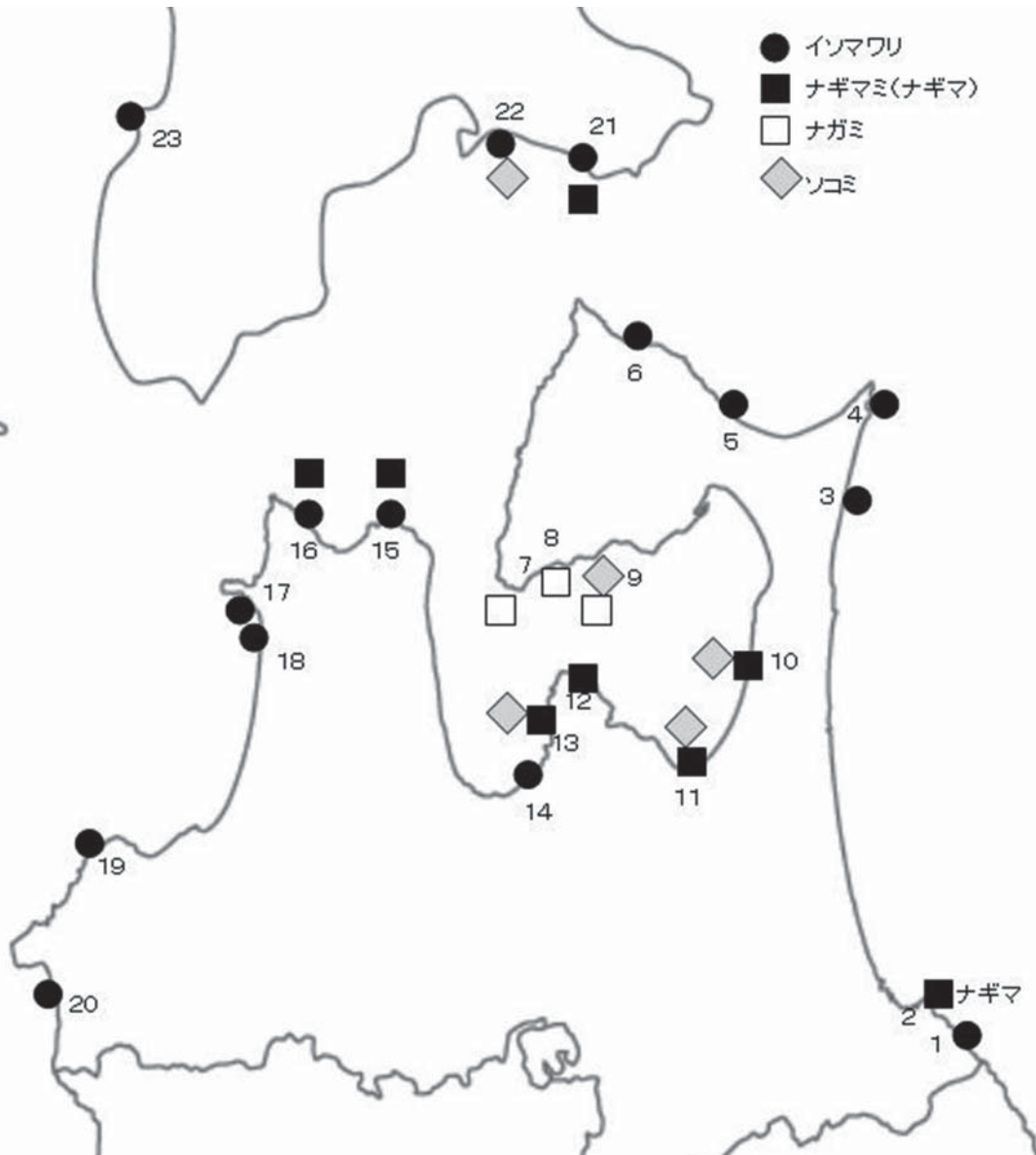


図1 磯漁名称分布(番号は表1の地名番号に対応)

うふうで漕ぎ手と取り手の息が合わないとなかなか難しい作業であった。親が取り手で子供がクルマガイというように気の知れた同士が組となって行なった。(昆政明 1991)

(3) むつ市脇野沢寄波 表1-7)

磯漁をナガミといった。ナガミはハコメガネで海中を見てとる漁である。アワビ、ウニ、ナマコなどをとった。ここはワカメはとれるがコンブはない。ホコは重さがあった方が、細くても方が浮き上がらず使いやすいので、カシかトドマツを使用した。細い方が水の抵抗が少ないので、扱いやすかった。漁は二人が組になって行うことが多く、一人がオモテ（船首部分）のマエ（右舷）で漁をし、一人がカイカキとしてクルマガイを操作してとり手の指示に従って船を動かした。この際に「マエ、アケロ」といった場合には船を左舷側に移動し、「ウシロ、ウシロ」といった場合には右舷に移動した。(昆政明 2003)

(4) むつ市脇野沢小沢 表1-8)

磯漁をナガミといった。ナガミは海中をガラス（ハコメガネ）で見てアワビやウニ、ホタテ、アカザラ、ナマコなどをとった。ナガミの時期は、ニシン場から帰ってからの、マミズ（雪解け水）がおさまった頃から漁に出た。ガラスを使う以前には缶にコウナゴの油を絞ったカスを入れておいて、アラシが出てくれば、カスを海に投げると、波が静まって底が見えるようになった。タラアブラを使うこともあった。普段は一人で操業し、足でクルマガイを操作した。(昆政明 2003)

(5) むつ市川内町蛸崎 表1-9)

ナガミは古い言葉で、近年はソコミという。ソコミではウニ、アワビ、ホタテ、アカザラなどをとった。作業は二人が船に乗り組んで行った。一人がオモテ（船首側）のマエ（右舷）で、船の上からガラス（箱メガネ）で海中を見ながらホコの先に着けた漁具でウニやアワビをとり、一人は船のトモ（船尾側）で、捕り手の指示に従ってクルマガイを操作した。一人で言う際には、オモテの右舷から身を乗り出し、ガラスをかぶって、足でクルマガイを操作した。海中を覗くのにガラスを使用する前は、タラアブラを流して海中を見た。タラアブラはタラの内臓から油をとった。内臓を容器に入れておくとどろどろになり強い臭いを出した。この油は船を引き上げる際に敷くスベリにも付けた。(昆政明 2003)

(6) 東津軽郡平内町東田沢 表1-12)

ナギマミ（突き漁）。以前は、波を鎮め視界を良くするため海面に油をたらすことがあったという。油の種類はナタネ油がほとんどであった。シラスミ油というものを記憶している人もいた。(小林亜希子 2003)

(7) 東津軽郡平内町浦田 表1-13)

ソコミ、ヤストリ（突き漁）。ナギマミともいう。ガラスバコとヤス、タモを使って、海底のウニ、アワビ、ナマコなどを獲る。年中獲れるが、ウニは海藻の多くはえている6月にもっとも獲れるという。浦田では、現在後藤石之助のみがこの漁を行っている。後藤石之助は1人で漁をするが、たいていは夫婦一組で行われ、ガラスバコを覗く男性の指示で、女性が船を動かす。この女性の作業のことをトモドリという。(小林亜希子 2003)

(8) 東津軽郡今別町褰月 表1-15)

今別町褰月では磯漁をイソマワリという。戦前ではこれをナギマミといった。漁獲物としてはワカメ、テングサ、モジユク、ウニ、エゴ、コンブ、テングサ、アワビ、タコなどがあつた。

これらの漁は、船の上からガラスという箱メガネで海中を見ながら行った。ホコには重さのあるカシやオノレの木を使用し、ホコ先に採取する種類に合わせたさまざまな漁具を取り付けた。ヒバは軽いのでカシやオノレの木に見合う重りを付けて使用した。ホコの先に付ける鉄製の漁具は鍛冶屋に作ってもらった。ホコには浮力を相殺するため鉄製の重りを装着した。5尺の長さで百匁の重りを付け、深いところでは10ヒロ（1ヒロ5尺）の深さで1貫目4四キロ弱）の重りが目安であった。

船の前部をオモテ、中央部をドノマ、後部をトモといった。イソマワリの作業はオモテの右舷側から身を乗り出し作業した。作業する側の右舷をマエフネ、反対の左舷をウシロフネという。推進具はクルマガイと帆を使用した。イソマワリを一人で行うときには右舷から身を乗り出し、右手でホコをもちガラス（箱メガネ）を口で固定し、左舷のクルマガイは左手、右舷のクルマガイは右足で漕いで船を微妙に移動させた。この技術は難しいもので、褰月の人が一番うまく、北海道にも伝えたものだ、



写真1 磯舟（今別町褰月）

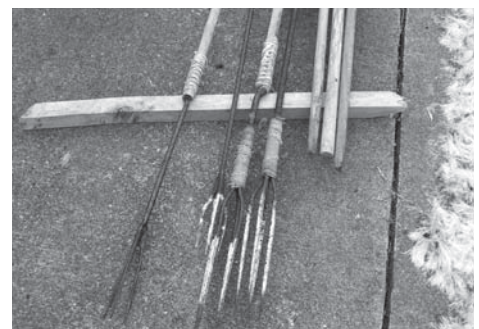


写真2 ウニヤスとホコ（今別町褰月）

と言われている。また、今日ではタモイシキ（タツポング）という小型のネリガイ様の推進具を使うことが多い。これの起こりは定かでないが、曇月だけで用いられるものである。イソマワリを二人で行うことをトモドリという。これは漁をする者の他に一人がトモで獲り手の指示でクルマガイを操作するものである。（昆政明 2009）

（9）東津軽郡外ヶ浜町三厩宇鉄 表1-16）

磯物漁をイソマワリあるいはナミマミと呼ぶ。三厩村（注：現外ヶ浜町）の地先海岸はほとんど岩礁地帯であり、昔からアワビ、コンブを始め磯物漁の良い漁場として知られており、地区漁民も磯物漁に依存してきた。しかし、アワビは枯渇状況にあり、資源保護をするためここ数年漁獲を控えている。アワビ、コンブの他フノリ、ノリ、ツノマタ、ワカメ、テングサ、モズク、エゴ、エギス等の海藻類やウニ、サザエ等の磯物がとれる。（中略）

アワビのカギドリはホゴの先にアワビカギを接続し、深さ7～10ヒロの所で船の上からガラスで海底を覗き、カギで引っ掛けて採捕するもので、アワビカギとホゴの間にニキヨ（コガヅラ）を装着する。これは弾力のある蔓で、この弾力を利用して岩に付着しているアワビを引っ掛ける。最近では弾力材にステンレスをつけた小型のカギを漁協を通して購入する人もいる。この型のカギは岩手県産である。かなり以前には現在ウニやサザエを突きはさむのに使用している三本ヤスのような漁具でアワビの貝殻の上から突き刺してとる方法もあったといわれるが使用時期については不明瞭である。（成田敏 1987）

（10）北海道函館市銭亀沢 表1-21）

海岸近くの磯で行う漁を一般には磯漁と呼ぶが、銭亀沢ではイソマワリといい、昔は「ナギマミ」といった。ナギマミは、ナギマともいい、その名の通り「凧間」をみる漁業で、凧の間を利用し、船から海底をのぞき見て行う漁といえる。この名称は、相当の年輩者の記憶に残るもので、現在では統計上の名称として「ネツケ」「ネツケ漁業」という言葉が使われることも多く、すでに失われようとしている言葉である。（中略）イソマワリには、アワビ、ウニ、ツブ、テングサ、タコ、コンブ、ワカメなど多くの種類があるが、コンブ、ワカメをイソマワリに含めない考えもある。イソマワリは通常一人で作業する。これは熟練を要する技術で、その様子はトモ（船尾）の左舷から身を乗り出し、口でガラス（ガラスは箱メガネのこと）をくわえ、右手で右舷のクルマガイ、右足の膝（足にツマゴを履いていた頃はツマゴにクルマガイを固定した）で左舷のクルマガイを操作しながら海中をのぞき、とる時には右手のクルマガイをはなし、両手でホコを使うというものである。（昆政明 1998）

3 おわりに

青森県および北海道渡島半島南部の地域では、磯漁の呼び方としてイソマワリとソコミが一般的である。これらの分布の特徴を見ると、イソマワリは太平洋沿岸・津軽海峡沿岸・日本海沿岸に分布し、ソコミは陸奥湾内と渡島半島南部に一部見られる。ナギマミ・ナガミは陸奥湾沿岸と津軽海峡沿岸の津軽半島側および渡島半島に分布している。また、太平洋沿岸の八戸市にはナギマという名称が分布しているが、これもナギマミと同様であると考えられる。

ナギマミ・ナガミとも、イソマワリあるいはソコミ以前に用いられた名称として認識されており、今後確認調査を行えば分布が広がることが予想される。

ナギマ（凧間）を見るとは、ガラス（箱メガネ）使用以前、海面に油を垂らしてさざ波を押さえ、海底を覗きやすくして漁を行ったことから来ていると考えられる。その意味で、ソコミとナギマミは同じ概念であると言えるが、イソマワリの場合、海底を覗いて漁をする、いわゆる見突き以外にも、刺し網漁や一本釣り漁などを含む場合と、逆に海岸の磯場に付く海藻類を、船を使わず磯伝いに移動して採取することに限定的に捉える考えもあることに注意する必要がある。

今回の報告は、これまで磯漁をあらわす言葉として用いられてきたイソマワリとソコミ以前にナギマミ・ナガミがかなり広範囲に用いられていたことを紹介し、同様の事例の広がりについて注意を喚起し、情報の収集のきっかけとなることを目的にしたものである。

引用参考文献

- 辻井善弥 1999 「磯漁」「見突き」『日本民俗辞典』吉川弘文館
- 昆政明 1990 「生業」『野辺地の社会と民俗 野辺地の事例』北海道みんぞく文化研究会
- 昆政明 1991 「生業」『野辺地の社会と民俗 有戸の事例』北海道みんぞく文化研究会
- 昆政明 2003 「生業」『下北半島西通りの民俗』青森県史叢書青森県
- 小林亜希子 2003 「生業」『夏泊半島の宗教と民俗』弘前大学人文学部宗教民俗学実習報告書Ⅱ 弘前大学
- 昆政明 2009 青森県史調査（未刊行）
- 成田敏 1987 「生業」『宇鉄の民俗』青森県立郷土館
- 昆政明 1998 「銭亀沢の生産労働」『函館市史 銭亀沢編』函館市